2024 年 5 月 12 日　説教「危うく守られたパウロ」

使徒の働き　21 章 27～40 節

覚悟をもってエルサレムに入ったパウロ一行ですが、教会の人々から温かく迎えられました。長老達の進言で、誓願を立てている人々とともに清めの儀式に参加したパウロでありました。

１．宮の外に引きずり出されたパウロ（27～30 節）

①扇動するユダヤ人達（27~28）**「ところが、その七日がほとんど終わろうとしていたころ、アジヤから来たユダヤ人たちは、パウロが宮にいるのを見ると、全群衆をあおりたて、彼に手をかけて、こう叫んだ。「イスラエルの人々。手を貸してください。この男は、この民と、律法と、この場所に逆らうことを、至る所ですべての人に教えている者です。そのうえ、ギリシャ人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所をけがしています。」**

ナジル人の誓願は 30 日間ありますが、七日が終わる頃に、アジヤから来たユダヤ人達が扇動行動を始めました。パウロの伝道旅行において、しばしば敵対行動をした人々でした。彼らは、イスラエルの人々に巧みに訴えます。つまり、パウロが律法に背信する教えを、アジヤ各地でなした上、ギリシャ人をこの宮に連れ込んで、神聖な場所を汚しているといったような、誤りの宣伝をしたのです。

②エペソ人トロピモが（29）**「彼らは前にエペソ人トロピモが町でパウロといっしょにいるのを見かけたので、パウロが彼を宮に連れ込んだと思ったのである。」**

ユダヤ人が問題にしたのはエペソ人トロピモを、パウロが宮の神聖な場所である聖所に連れ込んだということでした。しかし、トロピモがパウロと一緒にいたことはあっても、彼らの見立ては事実ではありませでした。

③パウロは捕らえられ（30）**「そこで町中が大騒ぎになり、人々は殺到してパウロを捕らえ、宮の外に引きずり出した。そして、ただちに宮の門が閉じられた。」**

町中は大騒ぎになりました。そして、パウロを捕らえました。宮の外に出しました。そして、宮の門は閉じられました。ここでいう宮というのは、聖所のある地域です。

２．殺されかけたパウロ（31～36 節）

①駆け付けた千人隊長(31～32)**「彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、ローマ軍の千人隊長に届いた。彼はただちに、兵士たちと百人隊長たちとを率いて、彼らのところに駆けつけた。人々は千人隊長と兵士達をみて、パウロを打つのをやめた。」**

パウロは宮の外で殺されそうでありました。ところが、この騒ぎの事がローマの千人隊長の耳に入ったのです。百人隊長や兵士たちを連れて、

事件現場に駆け付けました。パウロに、今まさに手をかけてんとしたところでしたが、ユダヤ人達は手を離しました。

②鎖につながれたパウロ（33～34）**「千人隊長は近づいてパウロを捕らえ、二つの鎖につなぐように命じたうえ、パウロが何者なのか、何をしたのか、と尋ねた。しかし、群衆がめいめい勝手なことを叫び続けたので、その騒がしさのために確かなことがわからなかった。そこで、千人隊長は、パウロを兵営に連れて行くように命じた。」**

千人隊長もこの混乱の原因がパウロにあると見て、改めて捕縛し、鎖につなぎました。そして、パウロが誰なのか、事件の経緯などを尋ねました。しかし、あまりにも騒がしく、兵営にパウロを連れていくことにしました。

③かつがれたパウロ（35～36）**「パウロが階段にさしかかったときには、群衆の暴行を避けるために、兵士たちが彼をかつぎ上げなければならなかった。おおぜいの群衆が、「彼を除け」と叫びながら、ついて来たからである。」**

城壁の階段をのぼるときに、群衆たちは「彼を除け」と叫び、大変危険な状態でした。暴行が予想され、それを避けるために、兵士達たちは、パウロを守るために、彼をかついで上ったのです。

3. 千人隊長の許可を得たパウロ（37～40 節）

①ギリシャ語で（37～38）**「兵営の中に連れ込まれようとしたとき、パウロが千人隊長に、『一言お話ししてもよいでしょうか』と尋ねると、千人隊長は、『あなたはギリシャ語を知っているのか。するとあなたは、以前暴動を起こして、四千人の刺客を荒野に引き連れて逃げた、あのエジプト人ではないのか。』と言った。」**

パウロはこんな時にも、証するチャンスを求めて、千人隊長にお願しました。すると隊長はパウロがギリシャ語を話すのに驚き、パウロがエジプト人の暴動犯ではないことを認めました。

②ローマ市民です（39）**「パウロは答えた。『私はキリキヤのタルソ出身のユダヤ人で、れっきとした町の市民です。お願いです。この人々に話をさせてください。』」**

そこで、パウロは自分がタルソ出身のユダヤ人であることと、ローマの市民権を持つ者であると伝え、改めて願ったのでした。

③話を許されたパウロ（40）**「千人隊長がそれを許したので、パウロは階段の上に立ち、民衆たちに向かって手を振った。そして、すっかり静かになったとき、彼はヘブル語で次のように話した。」**

千人隊長は、それを聞いてパウロが話すことを許可しました。彼は城壁の階段の上で手を振り、騒ぎが治まり静かになったころに、ヘブル語で話し出したのでした。

《結論》 カイザリヤにおいて、アガポはエルサレムに行けば、捕縛されると預言した。そこで、周りの者たちは行かないように制止しましたが、パウロは死ぬことも覚悟していると進みました。エルサレムに入ると、教会の者たちた歓迎してくれ、何も起きないようにもみえました。ユダヤ人クリスチャン達の理解を得るために、ナジル人の誓願をする人々にも同行したパウロでした。ところが7日が過ぎた時に、アジヤを巡ってクリスチャンに迫害を加えていたユダヤ人たちがやってきて、パウロに攻撃の手を伸ばし始めました。人々を扇動して、パウロが律法に逆らい、ユダヤ人の慣習を軽視していると振れ回ったのです。町中は大騒ぎになり、パウロはついに捕らえられてしまいました。アガポの預言通りだったと言えます。そして、宮の外に出すと、彼らは早速パウロに手を下して、殺害しようとしました。

しかし、危機一髪。この騒動を知った千人隊長が事件現場にやってきたのです。パウロの命は守られたのです。これまでも、パウロは宣教現場で反対を受けて、危うい状態になったことが何度もありました。あのエペソの地においても大騒動が起きました。その時に、その騒ぎをおさめたのは、町の書記役でした。主はこの人を用いて、パウロを始めとするクリスチャンを守ってくださいました。今回もあと少しでも千人隊長が来るのが遅れれば、パウロの命は失われていたことでしょう。

創世記 22 章において、アブラハムは主のご命令のままに、モリヤの地において、与えられた息子イサクをいざ屠らんとしたのです。しかし、その直前に主はアブラハムの手を止められ、代わりに雄羊を備えて下さいました。アドナイ・イルエ、「主の山に備えあり」でした。

今朝の聖書箇所では、主は千人隊長を用いられました。確かにパウロはユ、ローマ兵軍によって捕縛されました。しかし、パウロの命を守られたのです！そればかりか、彼がギリシャ語を話し、ローマ市民権を持っていることが認められ、信用されて、彼は人々の前で、話すことを許されたのです。

私たちは試練が生じれば、否定的な考えを持ちやすく、苦しみ悩み、落ち込みやすいです。筋違いな憎しみを覚えたり、怒りの思いに支配されたり、失望、落胆にも陥りやすいのです。信仰的な考えや思いが小さくなり、世の考え方に囚われてしまうのです。

しかし、御言葉は教えてくれます。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの、神は愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」（コリント第一 2:9）。

主なる神は、私達の見たことも、聞いたこともなく、思いつかない方法、道すじ、あり方などによって、事をなしてくださるのです。神さまが星野富弘さんを、大いに用いられた道筋は、人間的にはつらく、難しく、受け入れがたいものでした。しかし、恵みによるキリストとの出会い、口に筆をくわえての詩画を通しての証し。それは多くの人々に励ましや慰めを与えました。キリストに導かれた方々も少なくないでしょう。神のなさることは人間の考えを越えているのです。

主がなしてくださることに希望をいだき、今週も信じて歩んでいましょう。